箱庭療法における作り手の変容機序について

― 我が国の箱庭研究の概観と展望 ―

千葉　友里香

Ⅰ. 問題と目的

箱庭療法が河合隼雄によって日本に導入されてから 50 年余りが経過しようとしており，箱庭は我が国において独自に発展するとともに，数多くの研究がなされている。箱庭が心理療法として成立する所以についても多様な視点から検討がなされているが，箱庭療法でなぜ作り手が変容していくのかという問いに対する答えは，現在も模索し続けられていると言える。それに対する答えを見出していくことは箱庭療法の本質に迫ることであると同時に，心理療法におけるクライエントの変容を考える上でも示唆を与えるものとなるほど重要であると考える。箱庭療法における作り手の変容機序について現在までに明らかになっている知見を整理し，さらに議論されるべき視点を示すことで今後の研究へと生かしていくことは必要と思われるが，そのような問題意識から箱庭研究を概観している研究は見当たらない。遠藤（2010）は，箱庭療法に関する 208 の論文を概観しているが，それらの論文は日本箱庭療法学会の機関紙『箱庭療法学研究』に掲載されているものに限られていると同時に，箱庭における変容について論じているものではない。また楠本（2009）は，箱庭における体験を扱っている研究から箱庭療法における治癒と変容について論じているが，作り手の主観的体験に焦点を当てることで箱庭の治療的要因に迫っている石原（1999，2002，2007，2008）の研究などは取り上げられておらず，十分とは言えないだろう。よって本論では，箱庭療法における作り手の変容に関する我が国の箱庭研究を概観し，そこから，作り手の変容機序を探っていく上で，今後必要と思われる視点を示すことを目的とする。

Ⅱ．箱庭研究の概観

我が国では箱庭療法において多様な観点から研究がなされているが，研究の大きな流れとして〈臨床事例研究〉，〈基礎的研究〉，〈見守り手に関する研究〉，〈言語化に関する研究〉，〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉，〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉の 6 つがあると考えられる。一つ目の〈臨床事例研究〉とは，何らかの知見や新たな技法等を示す目的の中で事例を検討しているものは含めず，箱庭を用いた臨床事例自体の検討を目的としているものであり，我が国の箱庭研究における中心的アプローチであると言える[1]。〈見守り手に関する研究〉，〈言語化に関する研究〉，〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉の三つは，導入当初より箱庭の治療的な性質に関わるものとして重要視されてきたテーマである。箱庭療法について体系

的にまとめられている河合（1969）や岡田（1993），東山（1994）においても治療の進展に関わる要因として積極的に取り上げられており [2]，各観点における流れの中で現在まで研究が進められていると言える。〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉は，近年特に見られるようになってきた研究であるが，箱庭の治療的要因に直接的にアプローチしているとして注目を集めている。作り手の変容機序を検討する本論においても，重要な位置を占めると言える。

以上 5 つの観点による研究が作り手の変容に関するものであると考えられたため，観点ごとに研究を概観し，変容機序を考える上での寄与や位置づけ，課題について述べる。なお，もう一つの観点である〈基礎的研究〉[3] は，箱庭療法における基軸となる知見を与えるものとして重要と考えられるが，作り手の変容に関する研究ではないとして本論では扱わないこととした。

1．臨床事例研究

まず，我が国の箱庭研究の大多数を占めているものとして臨床事例研究が挙げられる。箱庭療法の入門書として位置づけられる『箱庭療法入門』（河合，1969）では，箱庭の技法や理論的背景が述べられるとともに 9 つの臨床事例が検討されている。「まず大切なことは，作品をできるだけシリーズとして見ることである。つまり一回だけの作品でなくこれが続けて行われたとき，どのように変化し，どのように関連していくかに注目することである」と述べられているように，導入当初から，箱庭とそれを表現したクライエントの理解のためには事例検討が欠かせないと考えられてきた。河合・山中（1982，1985，1987）による『箱庭療法研究』や高橋ら（1990，1991）にてまとめられている箱庭関連の文献一覧を見ると，1980 年代頃までは，思春期を含む子どもへの適用を中心として臨床事例研究がなされてきたことがわかるが，現在まで，箱庭が用いられる対象，現場は拡大し続けている。心身症や摂食障害など様々な疾患を抱えたクライエントの事例（伊藤，2003；北添，1997），平松（1998）で展望されているような精神病圏のクライエントの事例，発達障害を抱えるクライエントの事例（吉岡・古田，2011；北添，2011），虐待など心的外傷体験を負ったクライエントの事例（高野，2002；村本，2007），脳機能障害を抱える高齢者の事例（秋本，2007），全盲のクライエントの事例（木村，1999）などがあり，制作された箱庭をもとにクライエントに対する理解を深めていくと同時に，クライエントの抱える心理的テーマや障害との関連において，箱庭の可能性や限界について検討されていると言える。また，学校（安島，2006）や司法現場（立川，1997）といった特定の現場で箱庭を用いた臨床事例研究では，その現場特有のテーマや難しさとともに，箱庭の有効性について述べられている。さらに，オーストラリアや南アフリカなど，海外での箱庭事例も見られ（伊藤, 2002；櫻井, 2007），文化の差異を比較した上で日本の箱庭の特徴について検討されている。このように，箱庭は幅広く用いられ，その対象，現場における適用可能性について議論されているが，臨床事例の理解に関しても多様な視点から考察がなされている。最も多くみられるのは，箱庭表現とクライエントの心理的テーマとの関連からの考察であり，箱庭をイメージや象徴の点から系列的に見ていくことで変容プロセスを論じているものである。クライエントにとって，箱庭がどのような意味で治療的に働いたのかという点に関しては，箱庭が内的世界の表現の場となったこと（村本, 2007），言語ではなく非言語的な表現が可能になること（河合, 1969；高野，2002），箱庭が作り手と見守り手との関係性の媒介物となること（広瀬，2009），箱庭のもつ容器性が作り手と見守り手とを守るものになること（吉田，2002）などといった考察がな

されており，個々の臨床事例の理解から作り手の変容機序に結びつく知見が提示されてきたと言える。ここでは一部の臨床事例研究を挙げるに留まったが，事例研究によるこれらの知見は以下で論じていく観点と密接に関わっており，変容機序に関する視点を示し，かつ実証するものとして，臨床事例研究は我が国の箱庭研究の基礎をなしていると言えるだろう。

2．見守り手に関する研究

箱庭を創始したカルフ（1972）が，「母子一体性」という作り手と見守り手との深い関係性のもとで「自由であると同時に保護された空間」を創り出すことの治療的意味を説いたことから，我が国においても，見守り手の存在の意味について様々に検討されてきた。山中（1958）は箱庭療法における見守り手の態度について論じているが，その後斎藤（1991）や野副（1997）など，見守り手が箱庭にどのように着目し，理解しているのかを示すための研究がなされるようになった。これらの研究は，治療者として箱庭を見守ることがいかなることであるのか，その専門性を示すものである。さらに清水（2004）は，調査面接により見守り手の主観的な体験を明らかにするための研究を行っており，見守り手の存在による作り手に与える作用の検討へと結びつくものと考えられる。その意味で，作り手と見守り手との関係性を検討するための土台となる研究であると考えられるが，そこから発展し，箱庭制作の場における作り手と見守り手の関係性についての研究も近年見られるようになった。中道（2010），石原（2013）では，作り手が同時期に関係性の異なる見守り手の前で箱庭を作ることに関して考察がなされており，導入当初から重要と言われてきた作り手と見守り手との関係性のテーマについて，調査事例，臨床事例をもとに論じられている。変容を促すと言われてきた「母子一体性」という関係性や「自由であると同時に保護された空間」が，具体的にどのような関係性であって，関係性の違いが箱庭作品，箱庭体験にどのように影響するのかについて実証的に述べられた研究は過去になく，作り手と見守り手の関係性という視点からは作り手の変容機序について議論されずにきたと言っても過言ではないが，これら二つの研究は，そのテーマに示唆を与えていると考えられる。しかし，石原（2013）において「未完成な仮説の提起にとどまった」と述べられているように，いまだ十分に検討されているとは言い難い。作り手の変容という視点から考えると，複数の見守り手という形での関係性の違いが箱庭作品，箱庭体験にどのように影響するかを論じるだけでなく，同じ見守り手との間で時間をかけた関係性の深まりを体験していくことが，作り手の変容といかに関連するのかに焦点を当てた研究も必要と考えられるだろう。

3．箱庭の言語化に関する研究

箱庭をどの程度，どのように言葉にしていくのかということも箱庭導入当初から議論されており，言語化の意味を明らかにすることも箱庭研究の大きな流れの一つとなっている。見守り手による言語化，いわゆる解釈については，河合（1969；1993）などにおいて，性急な解釈は控えて味わう態度を大切にするべきであると主張されてきた。それにより，見守り手が箱庭について言葉にして返すということはデリケートな問題であると考えられてきたが，田中（2002）は，解釈や言語化をしないということが箱庭を理解しないことではないと強調し，味わう態度の中に，見守り手側の深い理解があることが重要であるとしている。一方，作り手が自身の箱庭について言葉にすることについても，様々に研究がなされている。三木（1977）が治療者の内的訓練法として考案した箱庭にモノローグをつける方法は，その後「箱庭物語作り法」（岡田，

1993）などと名前を変えつつ，「意識レベルでのイメージの拡大」（岡田，1993）という意味を持つとして用いられている。片坐（1990），菅（2003），森（2007）は，実際のクライエントや調査協力者に対して物語作り法を用いた事例を検討し，その有効性について述べているが，一方で，作り手の体験から物語作り法について検討している長谷川（2011）は「箱庭物語作り法の臨床実践への適応は，相当慎重にあるべきだと考えられる」と述べている。さらに箱庭を言葉にすることについては，箱庭に認知物語法を取り入れた大前（2010）の研究，制作後の作り手と見守り手との言語的やりとりに表れる体験過程に焦点を当てた平松（2001）の研究，制作後に箱庭を言葉にすること，名づけることにおける作り手の体験について述べた千葉（2013）や井芹（2013）の研究が見られる。箱庭の言語化についてはその意義と危険性の両面が常に述べられており，丁寧に検討されるべきと言えるが，それは，言語化が作り手の変容を促進するのか阻害してしまうのか，あるいはどのような言語化であれば促進しうるのかという点に大きく関わる。箱庭作品，箱庭体験を言語化することの意味についての研究は，変容機序を論じる上で一見遠いテーマであるように思われるが，制作後に箱庭を言葉にすることで作り手の変容が促される可能性があるということは，箱庭療法における変容機序を論じていく上で，制作後という時間にも目を向ける必要があることを示していると考えられる。

4．箱庭用具や治療空間に関する研究

また，砂，砂箱，ミニチュアなど箱庭用具についての研究もなされている。岡田（1993）は，箱庭療法の治癒的要因の一つとして箱庭用具の性質を挙げ，砂箱により空間に対して枠をつくること，ミニチュアによる三次元表現，砂による退行作用や感覚機能への作用について述べている。その後，弘中（2002）において箱庭で用いられるミニチュアの性質や意味が論じられ，調査研究としては，「砂あり条件」と「砂なし条件」を設定した面接より箱庭における砂の作用について論じている大石（2009）の研究がある。さらに，砂箱や箱庭制作という場に焦点を当て，箱庭が持っている治療空間としての力について考察している研究も見られる。仁里（2002）は，砂箱を中心とした箱庭空間の意味や治療的要因について述べ，大石（2010）は，箱庭療法の場が，面接室の中に砂箱という空間があるといった二重構造であることから，砂箱の場と制作の場という 2 つの場を行き来する作り手の体験を記述している。また山本（2002）は，箱庭の構造や機能について「こころの包み」という観点から考察する中で，箱庭が立体構成であることの空間軸と制作過程での心の動きが作品に時間経過として込められることの時間軸があることで，そこに治療空間が生まれるのだと述べ，箱庭の容れ物としての構造が治療的な展開の可能性を内包していると論じている。これらの研究からは，箱庭用具が治療的意味を有していることが述べられており，特に箱庭の空間性の視点から見ると，箱庭が変容を促す構造であることが示されていると言えるだろう。だたし，山本（2002）において，箱庭における空間性と同時に取り上げられている時間性を取り上げている研究は少なく，今後の研究が待たれる。

5．作り手の心の動きや主観的体験に関する研究

そして近年注目されてきたもう一つ大きな観点として，作り手の心の動きや主観的体験について論じている研究がある。岡田（1984）は「制作中の制作者の心の動きは大切であり，これこそが箱庭療法の核心でもあるから，制作過程の研究は今後の重要な課題である」と述べたが，その方法の難しさや日本の箱庭研究の中心が臨床事例研究であったことにより，直接的なアプ

ローチはなされてこなかったと言える。そのような事態について石原（2002）は，箱庭の臨床事例研究において，その表現内容，意味にばかりとらわれてクライエントの体験からかけ離れてしまう危険性を述べ「クライエントの表現とセラピストによる意味づけの間をつなぐものとして，表現の過程でクライエントがどのような体験をしているのか，また自らの表現についてクライエントがどのように感じているのか，というクライエント側の主観的体験を積極的に取り上げていくような研究が必要である」と指摘した。それを契機として作り手の体験に迫るための方法の工夫がなされ，作り手の心の動きや主観的体験について現在まで研究が進んでいる。これらは箱庭における作り手の変容機序に直接的に迫ろうとしている研究であるが，このような観点からの研究として，変容に向かう作り手の心の動きを理論的に論じているものと，調査面接における作り手の体験からそれに迫っているものとに大きく分けられると考えられたため，ここではそれぞれを概観していくこととする。

(1)作り手の心の動きに関する理論的研究

東山（1994）は「ぴったり感」（三木ら，1991）が箱庭療法の中心的役割を果たしている可能性があることを引用し，箱庭の治療的要因として「自己の本質をぴったりした表現で表すことができる過程」を含んでいることを挙げている。さらに「箱庭療法が治癒力をもつのは，自分のイメージをぴったりした形で表現でき，それが自分に目の当たりにフィードバックされる点である」として，作り手の心の動きについて述べている。また齋藤（1995）は，箱庭療法における作り手の心の動きについて，ユングによる心の四つの機能[4]のうち感覚と直観を手掛かりに論じている。感覚から直観に至るということは，イメージ空間の中で体験される心の動きが物語として継時的に展開していくことであり，それにより心が動いていく方向や意味が実感されていくと述べられているが，感覚，直観という視点に絞られていることについて「これらの機能は，目の前にある（あるいは，できつつある）箱庭の世界がどのように受け取られていくかに関わるからである」としている。これら二つの研究より，箱庭に自らの本質が表現されるとともに，作り手自身がそこから受け取るものがあることが作り手の心の動きに大きく影響し，治療的要因となっていると言えるだろう。それらを踏まえて河合（2002）は，作り手が自身の箱庭に対峙することが，作り手の在り方の変容の契機となることを示唆している。また中道（2010）では，クライエントが「自己の無意識との対話を通して，箱庭の中に内界を表現し，表現したものから意識的にも無意識的にもフィードバックを得る」とし，そのような「対自的コミュニケーション」がクライエントの変容へとつながることを述べている。これらの研究から，自身の作品が目の前に現れること，それにより感覚，直観の機能に訴えるような作用があること，その作用によって対自的な心の動きが生じ，それが作り手の在り方の変容へとつながる可能性があることが示されていると言える。

さらに，作り手の心の動きについて，別の視点から論じている研究もある。和田（2007）は，「箱庭制作にまつわる制作者の体験，特にイメージの広がりや身体感覚，気持ちといった側面は，固定されたものではなく，常に変化し動き続けるものと思われる。そうした制作者の体験を捉えるためには，そのような『動き』をそこなわない形で見ていく必要がある」と指摘し，作り手の体験が動的で変化していくものであることを強調している。また川嵜（2004）は，「置いたものに違和感がある場合，それを取り去ったり，先に置いていたものの位置を変えたり，

置くものを柵で囲ったり，砂のなかに埋めたりする動きが出てくる」ため，箱庭は「力動的な〈運動〉である」と述べている。さらに「箱庭を作成するなかで生じてくる『置かれた』ものの位置が変化するという力動以前に，クライエントが迷いつつ，棚からミニチュアを選んだ後に，それを取り上げ，また棚に戻したり，などの動きもとても大切である。完成した後の『静止画』としての箱庭には顕著に現れてこないが，そのような製作途中のプロセスの力動全部を含めて，箱庭とはダイナミックな〈運動〉なのである」と述べている。川嵜（2007）では箱庭の力動性について述べられており，箱庭には自我親和的な部分と自我違和的な部分が表れてくることがあり，自我違和的な部分の存在や自我親和的な部分との関係の作られ方に力動性が孕まれているとしている。自我違和的な部分を取り除くのではなく，既成の秩序と接触し，それが崩されることで新たな秩序が生まれ，それが変容であると論じている。つまり，制作中の作り手の心はイメージや身体感覚などの点で非常に力動的であり，その中で，本来自分であれば置かないような自我違和的なものをいかに取り入れ，受け入れていくかというところに，力動性による変容のきっかけが存在していると考えられるだろう。

(2)作り手の主観的体験に関する調査研究

作り手の主観的体験に関する調査研究も同時に積み重ねられている。上記の理論研究による知見を足掛かりとした上で，石原（1999）は「（箱庭）作品を十分に理解するためには，箱庭制作に伴う個々の制作者の主観的な体験，すなわちどのような意図をもって作ったのか，出来上がった作品からどのような感じを受けるのかといったことを理解する必要がある」との意図から，その内容を具体的に理解しようとし，箱庭療法に PAC 分析を用いることで作り手の体験に迫っている。石原の研究は，箱庭を置くことがなぜ治療的に働くのかという疑問に直接的に迫ろうとするものであると同時に，それまで見逃されてきた作り手自身の体験を実証的に示そうとするものであり，我が国の箱庭研究の流れに大きなインパクトを与えたと言える。実際にその後，作り手の主観的体験に焦点を当てた研究は増加し，PAC 分析とぴったり感の関連から作り手の主観的な体験に迫っている後藤（2003）や，PAC 分析によるイメージ内容，イメージ体験の変移を論じている佐藤・有園（2009）などがある。また楠本（2011，2012，2013）においても，作り手の主観的体験を明らかにしていくことの必要性を述べた上で，箱庭制作，「自発的説明過程」，「調査的説明過程」，「振り返り面接」などを設定した調査面接を行い，質的研究法によって作り手の体験を多次元的，多層的に描き出している。PAC 分析や質的研究法を用いたこれらの研究は，作り手自身に可能な限りの言語化を促すことで作り手の体験を記述するものであるが，何十分もの時間がかかる箱庭制作体験を制作後に言語化することで，言語化されずに抜け落ちている体験が存在する可能性があること，制作後に自らの作品を味わうこと，振り返ることで新たな心の動きが生じている可能性があることなどを考えると，作り手の体験に迫る方法としては十分ではないとも考えられる。それらのことを考慮し，箱庭制作中に働く様々な要因をできる限り単純に，かつ，箱庭制作の要素を失わないようにする方法として考案された方法が「ミニチュアを一つだけ選び，砂箱に置く」という箱庭制作（石原，2002）である。これは「たくさんあるミニチュアの中から，『これだ』と思うものを一つだけ選び，選んだ一つのミニチュアを砂箱の中の『ここだ』と思うところへ置くように教示」し，体験を言語化してもらう方法である。これにより，箱庭制作での体験をより正確に，詳細に記述することが可能

になると考えられ，その方法が用いられてきた。

片畑（2006；2007）は，箱庭制作中の作り手の内的体験を検討するため，一つのミニチュアを置くという方法[5]による調査事例を提示している。イメージの中でミニチュアを置いたあと，イメージしていた過程に沿って実際にミニチュアを置いてもらうという手続きであったが，片畑（2006）で取り上げられている作り手において，ミニチュアを置く場所をイメージする際にミニチュアが勝手に動き出すような自律的なイメージ体験があったこと，ミニチュアを置く位置を決定する際にバランス感覚などといった身体感覚が賦活されたことが述べられている。さらに，イメージしていたようにミニチュアを置く際にイメージとのずれを感じるような体験があったこと，同時に，ミニチュアを置く場所については「ここしかない」と確信的に感じられるような体験があったことについても述べられている。片畑（2007）での作り手については，箱庭作品をイメージする教示後すぐにミニチュアの位置や背景の砂の形が決まり，ただ瞬間的に「浮かんだ」体験がなされたこと，実際にミニチュアを置く際に「汚さ」や「箱の狭さ」によりイメージとのずれを感じる体験があったことが述べられている。さらに石原（2007；2008）は，作り手の主観的体験を検討することを目的として，一つのミニチュアを選び，置くという方法を用いた調査事例について論じている。石原（2007）での作り手は，一つのミニチュアを迷うことなく箱庭の中央に置くが，その後調査者の教示によってミニチュアを移動すると，箱の中の位置によって，空間的な広がりや開放感が体験されたり，砂箱が「箱」として意識されたりするような体験があったことを語っている。石原（2008）での作り手は，ピアノという一つのミニチュアを選んで置くことで，波打ち際を背にピアノを弾いている女性がいて，波がさざめく様子やピアノの音までが聞こえてくるという豊かなイメージの広がりが体験されたが，ピアノを別の位置に移動させるとそれらのイメージが消えてしまう体験があったことを語っている。これら4つの調査事例から，ミニチュアを選ぶ，置く場所をイメージして決める，実際に置いてみるというそれぞれの行為の裏には常に，ぴったり感やずれ，イメージの広がりなどといった作り手の体験が存在し，それらは，身体感覚など言葉や意識では捉えにくい作り手の体感の次元とも大きく関わっていることが明示された。ミニチュアを置く場所が「ここしかない」と感じることや，豊かなイメージ体験をすることなど，箱庭療法の本質に関わる主観的な体験が詳細に，具体的に示されたことには大きな意義があったと言えるが，これらの研究においてもまだ，作り手の変容機序を検討する上で不十分な視点が残されていると考えている。ここからは，以上で概観してきた5つの観点において残されてきた課題をもとに，今後の箱庭研究において必要と考えられる視点を示すこととする。

Ⅲ．作り手の変容機序に関する研究についての展望

1．箱庭における力動性

まず，作り手の変容機序に直接的に迫っていると考えられた五つ目の観点のうち，理論的研究で示されてきた作り手の力動的な心の動きと，調査研究で示された一つのミニチュアを選び，置くことの体験から，箱庭における力動性について論じたい。和田（2007）や川嵜（2004；2007）より，箱庭体験の動的な性質や力動性が論じられていたが，実際の作り手の心の動きはいかなるものなのか，作り手の体験のレベルで力動的な心の動きを検討していく必要性があると考え

られる。この点について，作り手の体験からアプローチしていた調査研究ではどのように扱われてきたのかを考えてみると，一つのミニチュアを選び，置くという方法であるが故に抜け落ちていた体験であることがわかる。置くミニチュアが一つに限られていることで，川嵜（2007）で述べられていたような，自我違和的な部分の存在による力動的な心の動きを体験することが難しい条件となっており，ここに，一つのミニチュアを選び，置くという方法の限界があると考えられるだろう。通常の箱庭制作では，複数のミニチュアが置かれていくことがほとんどであり，一つのミニチュアを置き，また次のミニチュアを置くという中で片畑（2006；2007）や石原（2007；2008）で明らかになったような体験が何度もなされていくことが想像される。その体験は，無数に，積み重なるようになされていくと考えられるが，そこで同じような体験が生じるとは限らず，ある部分ではミニチュアから「これを置きたかったんだ」という一致感を得るが，ある部分ではずれを感じるということ，ある部分ではミニチュアを置いたことでイメージの広がりが体験されたが，ある部分では広がりづらさが体験されるということは，複数のミニチュアが置かれる中で必ずと言っていいほど生じている体験であろう。箱庭という一つの世界を作っていく過程で，そのような一つひとつの異質な体験を積み重ねていくことが全体として作り手にはどのように体験されるか，そこでの心の動きを捉えることが，作り手の変容機序に直接的に迫るために重要であると考えられる。

2．箱庭における時間性

このような作り手の力動的な心の動きを検討していくには，ある一点での作り手の心の状態を深く検討するだけでは不十分であり，箱庭が時間を伴って制作され，その中で作り手の心が動いていくという視点が必要となる。それは箱庭研究の概観からも明らかになったことであり，以下の三つの意味での時間性が今後検討すべきとして考えられた。一つ目は〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉の概観から示されていたことであるが，制作時間の中での作り手の心の動き一つひとつが込められたものが作品となって表れるという，制作中のより微視的な時間軸的視点の必要性である。二つ目は〈言語化に関する研究〉の概観から示されていたことで，箱庭制作後における変容可能性が示唆されていることから，制作後の心の動きまでを視野に入れた研究が必要と言える。三つ目は〈見守り手に関する研究〉の概観から示されていたことであるが，作り手と見守り手との関係性の深まりから変容機序を検討するため，事例的に箱庭制作を重ねていくという意味での，より長い時間軸の視点が必要と考えられる。つまり，時間性に目を向けることでより臨床場面を想定した形での変容機序の議論が可能となると考えられ，時間の流れに沿った作り手の心の動きを取り上げる研究が必要と言えるだろう。

3．箱庭における対自性

ここまで述べてきたように，制作中に生じる作り手の力動的な心の動きを，より長い時間軸の中で捉える必要があると考えられるが，その際に重要となるのが〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉の中で述べた，対自的な心の動きであると考えられる。制作中は，作り手と箱庭とが一体となって制作が進んでいくが，制作が終わると作り手の目の前に箱庭が対象化されて現れ，自分が作ったものとしての箱庭に向き合うことで対自的な心の動きが生じることになる。そこで自らの在り方の契機になるような体験が生じ，変容へとつながっていくと考えられるが，ここで，改めて力動性，時間性に目を向けて箱庭を捉えた際に考えるべき点は，

箱庭を通した対自の体験に変化が生じていく可能性があることである。自分が作ったものとしての箱庭との関係性が内的に持続する中，箱庭，さらには箱庭を通した自分に対し，感覚的，感情的な部分での変化が生じたり，そこから言語や思考へと結びついたり，気づきという形で体験されたりと，箱庭という自分に対することの体験のされ方が変化していく。それは，数週間後，数か月後までも続いていき，臨床場面を想定すると，そのような心の動きによって再び箱庭を作ることにもつながると言える。このような箱庭を通した「自分」の体験のされ方の変容とは，まさに箱庭療法における作り手の在り方の変容に結びつくものあり，このような視点で箱庭研究を進めることで，箱庭を作ることでなぜ作り手が変容していくのかという問いに対し，一つの答えを提示できると考えられる。

4. 総合考察と今後に向けて

本論では，〈臨床事例研究〉，〈見守り手に関する研究〉，〈言語化に関する研究〉，〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉，〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉という 5 つの観点から我が国の箱庭研究を概観し，作り手の変容機序に関して，明らかになってきたことや課題を示してきた。また，作り手の変容機序を検討していく上で今後必要と思われる視点として，箱庭における力動性，時間性，対自性の三つについて論じた。それぞれの観点での研究の流れを概観し，現在まで集積された作り手の変容に関わる知見を整理できたこと，そこから作り手の変容機序について今後深めていくべき視点を論じることができたことは意義があったと考える。筆者は，今回取り上げた三つの視点をもって箱庭療法の変容機序に迫るため，箱庭と作り手との関係性の変化という視点から制作後の対自的な体験を捉えることを試み（千葉，2014），箱庭との関係性を通した作り手自身の在り様の変化について述べたが，本論で述べてきたような箱庭体験の広がりを網羅するには到底及んでいない。今後，ここで提起した課題について多角的に研究が重ねられることで，箱庭療法，さらには心理療法全体において，自らを表現することと表現した者の心の変容について新たな示唆が生まれていくと考えている。

謝辞：本論の執筆にあたりまして，ご指導いただきました皆藤章先生に感謝申し上げます。

注 1：遠藤（2010）によると『箱庭療法学研究』では，基礎的研究，理論研究，文献研究などがある中，事例研究は約 8 割を占めているとしている。

注 2：河合（1969）では，箱庭の「技法とその発展過程」について述べられる中で，箱庭用具の意味や制作後の質問による言語化，セラピストの態度について記述されている。岡田（1993）では，治療的要因に関する章の中で「クライエントと治療者との人間関係」，「箱庭用具の利点」が挙げられるとともに，別の章では「物語作り法」について論じられている。東山（1994）においても「箱庭療法におけるセラピストの意味と役割」，「解釈について」，「箱庭療法とミニチュア玩具」として，それぞれ取り上げられている。

注 3：基礎的研究とは，作り手の年齢や特性別に，制作時間やミニチュアの数などを比較する数量的研究や他の心理検査との比較研究などが含まれる。

注 4：四つの機能とは感覚，直観，思考，感情である。感覚とは「こころに働きかけてくるものをそのままに感覚情報として受け取る働き」，直観とは「こころに働きかけてくるものの表面上の特徴ではなく，その背後にある可能性や危険性を見て取る働き」，思考とは「その働きかけてくるものが『何なのか？』を判断しようとする働き」，感情とは「それが『どのような感じを起させるのか？』を判断しようとする働き」であるとしている（斎藤，1995）。

注 5：片畑（2006；2007）では，置くミニチュアが指定され，1 つのミニチュアを置くという方法であった。

文献一覧

秋本倫子（2007）．83 歳の脳血管障害患者のリハビリテーションの一事例―箱庭によって語られた物語．心理臨床学研究，**24**(6)，653-663．

千葉友里香（2013）．箱庭を語ることにおけるイメージ変容の体験－4 つの体験型とその意味－．箱庭療法学研究，**26**(1)，17-30．

千葉友里香（2014）．箱庭制作後における箱庭と作り手との関係性の変化について．京都大学大学院教育学研究科提出修士論文（未公刊）．

遠藤歩（2010）．『箱庭療法学研究』にみる箱庭療法研究の現状．箱庭療法学研究，**23**(1)，97-105．

後藤美佳（2003）．箱庭表現に伴う「ぴったり感」の PAC 分析．箱庭療法学研究，**16**(2)，15-29．

長谷川千紘（2011）．箱庭療法における物語作り法の検討．箱庭療法学研究，**24**(3)，35-51．

東山紘久（1994）．箱庭療法の世界．誠信書房．

平松清志（1998）．日本における精神分裂病の箱庭療法に関する文献的研究．箱庭療法学研究，**11**(1)，47-54．

平松清志（2001）．箱庭療法のプロセス―学校教育臨床と基礎的研究．金剛出版．

弘中正美（2002）．玩具．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の現代的意義，74-86．

広瀬香織（2006）．自己臭恐怖にまつわる「違和感」を巡る戦いと変容―箱庭・描画等を「共に眺める」ことの意味―．箱庭療法学研究，**19**(1)，49-64．

井芹聖文（2013）．作り手が箱庭作品を命名する体験の検討．心理臨床学研究，**31**(3)，466-476．

石原宏（1999）．PAC 分析による箱庭作品へのアプローチ．箱庭療法学研究，**12**(2)，3-13．

石原宏（2002）．箱庭制作者の主観的体験に関する研究―「PAC 分析」の応用と「一つのミニチュアを選び，置く」箱庭制作．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の本質と周辺，57-69．

石原宏（2007）．砂箱という仕掛け―制作者の体験を手掛かりに．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.16-25．

石原宏（2008）．箱庭におけるモノとイメージ―制作者の体験を手がかりに．藤原勝紀・皆藤章・田中康裕（編）．心理臨床における臨床イメージ体験．創元社，pp.332-339．

石原宏（2013）．クライエントとセラピストの関係の違いが箱庭表現に及ぼす影響についての一考察―箱庭療法の臨床事例でおきたある出来事を手がかりに―．佛教大学教育学部論集，(24)，1-19．

伊藤真理子（2002）．オーストラリアにおける箱庭療法への取り組み．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.260-267．

伊藤佐奈美（2003）．心身症児の箱庭療法の過程とその有効性について．箱庭療法学研究，16(1)，37-50．

Kalff, D. M.（1972）．カルフ箱庭療法．山中康裕・大原貢（訳）．誠信書房．

片畑真由美（2006）．臨床イメージにおける内的体験についての考察－箱庭制作体験における「身体感覚」の観点から－．京都大学大学院教育学研究科紀要，（52），240-252．

片畑真由美（2007）．箱庭制作における制作者の「体験」についての考察―調査の枠内で見られた一事例から. 岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）. 箱庭療法の事例と展開. 創元社, pp.70-79.
片坐慶子（1990）．サンドプレイードラマ法の試験的適用―自分らしく生きられなかった女子大学生の事例を通して．箱庭療法学研究，**3**(2)，79-91.
河合隼雄（1969）．箱庭療法入門．誠信書房.
河合隼雄・山中康裕（1982）．箱庭療法研究第 1 巻．誠信書房.
河合隼雄・山中康裕（1985）．箱庭療法研究第 2 巻．誠信書房.
河合隼雄・山中康裕（1987）．箱庭療法研究第 3 巻．誠信書房.
河合隼雄・中村雄二郎（1993）．トポスの知―箱庭療法の世界．TBS ブリタニカ.
河合俊雄（2002）．箱庭療法の理論的背景．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の現代的意義，110-120.
川嵜克哲（2004）．イメージを布置する技法―箱庭療法において“箱”の中に“ミニチュア”を“置く”ことの意味．皆藤章（編）．臨床心理査定技法 2．誠信書房，pp.207-253.
川嵜克哲（2007）．箱庭療法の「力動性」について―風景構成法，夢と比較しつつ．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.412-424.
木村晴子（1999）．箱庭療法適応の可能性をめぐって―全盲女性の箱庭制作．箱庭療法学研究，**12**(1)，3-14.
北添紀子（1997）．神経性食思不振症の箱庭療法過程．箱庭療法学研究，**10**(2)，3-14.
北添紀子（2011）．広汎性発達障害のある大学生の心理療法過程―箱庭療法を中心に―．箱庭療法学研究，**24**(3)，19-34.
楠本和彦（2009）．箱庭療法における体験と治癒・変容との関連．南山大学人間関係研究，(8)，89-118
楠本和彦（2011）．箱庭制作過程および説明過程に関する質的研究の試み．佛教大学大学院紀要教育学研究科篇，(39)，103-120.
楠本和彦（2012）．箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用（交流）に関する質的研究．箱庭療法学研究，**25**(1)，51-64.
楠本和彦（2013）. 箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究. 箱庭療法学研究, **25**(3), 3-18.
三木アヤ（1977）．自己への道―箱庭療法による内的訓練―．黎明書房.
三木アヤ・光元和憲・田中千穂子（1991）．体験箱庭療法―箱庭療法の基礎と実際―．山王出版.
森範行（2007）．箱庭物語作り法を試みた中三女子の一例．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.244-255.
村本邦子（2007）．トラウマ治療への箱庭療法適用可能性についての試論．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.401-411.
中道泰子（2010）．箱庭療法の心層．創元社.
仁里文美（2002）．砂箱．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の現代的意義，62-73.
野副紫をん（1997）．箱庭療法過程の見方に関する研究．箱庭療法学研究，**10**(2)，27-37.
岡田康伸（1984）．箱庭療法の基礎．誠信書房.

岡田康伸（1993）．箱庭療法の展開．誠信書房．
大石真吾（2009）．箱庭制作における砂の作用に関する一研究―作り手の主観的体験にもとづいて―．箱庭療法学研究，**22**(2)，63-71．
大石真吾（2010）．箱庭制作という場の特徴に関する一考察：2 つの場をめぐる作り手の体験に着目して．京都大学教育学研究科紀要，(56)，209-221．
大前玲子（2010）．箱庭による認知物語療法―自分で読み解くイメージ表現．誠信書房．
齋藤眞（1991）．箱庭表現に対する心理療法家の系列的理解．心理臨床学研究，**9**(1)，45-54．
齋藤眞（1995）．箱庭療法における「感覚」と「直感」．愛知教育大学研究報告（教育科学編），(44)，193-203．
櫻井素子（2007）．南アフリカの箱庭―南アフリカ・HIV ホスピスにおける箱庭療法とその周辺．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.294-303．
清水亜紀子（2004）．箱庭制作場面への立ち合いの意義について―ビデオ記録を用いたプロセス研究の試み―．箱庭療法学研究，**17**(1)，33-49．
菅佐和子（2003）．サンドプレイードラマ法を用いた自己探求の一試み―現代女性社会の攻撃性と母娘関係について―．京都大学医療技術短期大学部紀要，(23)，13-22．
立川晃司（1997）．矯正施設における箱庭利用の一事例―集団生活を拒んだ受刑者への箱庭療法．心理臨床学研究，**15**(3)，270-279．
高橋紀子・岡田康伸・番匠明美（1990）．日本における箱庭療法文献一覧表（Ⅰ）1966～1977 年．箱庭療法学研究，**3**(2)，92-96．
高橋紀子・岡田康伸・番匠明美（1991）．日本における箱庭療法文献一覧表（Ⅱ）1978～1984 年．箱庭療法学研究，**4**(1)，74-78．
高野祥子（2002）．壮絶な破壊の続いた幼児期被虐待児の箱庭療法．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の現代的意義，143-156．
田中千穂子（2002）．体験箱庭療法．岡田康伸（編）．現代のエスプリ：箱庭療法の本質と周辺，113-125．
和田竜太（2007）．箱庭制作過程における体験をめぐって―身体感覚やイメージの広がりを捉える試み．岡田康伸・皆藤章・田中康裕（編）．箱庭療法の事例と展開．創元社，pp.62-69．
山本昌輝（2002）．「箱庭」と「こころの包み」．箱庭療法学研究，**15**(1)，3-16．
山中康裕（1958）．治療者に求められているもの―箱庭療法において―．日本芸術療法学会誌，(16)，91-92．
安島智子（2006）．スクールカウンセリングにおける「被虐待児」との心理療法―幼児元型「遺棄された子ども」の活性化と，その変容過程―．箱庭療法学研究，18(2)，51-66．
吉田みを子（2002）．解離性障害の女子への箱庭と描画―セラピストの想像活動と治癒の転機をめぐって―．箱庭療法学研究，**15**(1)，43-56．
吉岡恒生・古田祥一朗（2011）．箱庭の中で誕生を繰り返した広汎性発達障害児の事例．箱庭療法学研究，**24**(1)，51-66．

（心理臨床学講座　博士後期課程 1 回生）

（受稿 2014 年 9 月 1 日、改稿 2014 年 11 月 20 日、受理 2014 年 12 月 26 日）

箱庭療法における作り手の変容機序について
―我が国の箱庭研究の概観と展望―

千葉　友里香

箱庭療法において作り手がなぜ変容していくのかという問いに対する答えは，現在も模索し続けられていると言えるが，本研究は，箱庭療法における作り手の変容に関する我が国の研究を概観し，そこから箱庭療法における作り手の変容機序を探っていく上で，今後必要と思われる視点を示すことを目的としている。〈臨床事例研究〉，〈見守り手に関する研究〉，〈言語化に関する研究〉，〈箱庭用具や治療空間に関する研究〉，〈作り手の心の動きや主観的体験に関する研究〉という 5 つの観点から作り手の変容に関する知見を整理していったところ，制作における作り手の力動的な心の動きを，時間軸を視野に入れて検討すること，そこでの作り手の対自的な心の動きに目を向けることが重要であると考えられ，変容機序に迫っていくためには，箱庭療法における力動性，時間性，対自性を検討していくことが今後必要であると考えられた。

Mechanism of the Psychological Changes in Sandplay Therapy: An Overview and Prospects of Sandplay Research in Japan

CHIBA Yurika

The mechanism underlying the psychological changes in sandplay therapy is still under investigation. This report presents an overview of research regarding the client’s psychological changes in sandplay therapy in Japan and discusses some points. Research findings regarding client’s psychological changes were arranged into 5 groups: (1)case studies, (2)studies about therapists, (3)studies about verbalizing sandplay, (4)studies about the sand, miniatures, the sand tray, and the therapeutic space, (5)studies about movements in clients’ minds and their subjective experiences. The results indicated that it is necessary to focus on the client’s dynamic movements in their minds by taking account of longer temporal axes and their psychological changes by facing themselves. It is necessary to investigate the psychological dynamics, time and facing themselves in sandplay therapy in future studies to determine the mechanism underlying psychological changes in sandplay therapy.

キーワード： 箱庭療法，概観と展望，変容機序

Keywords: Sandplay therapy, Overview and prospects, Mechanism of the psychological change